

まことと会便り

2011/5

去る三月十一日に起きました東日本大震災に関連して被災された皆さま、またそのご家族ご親族、有縁の皆様にご挨拶とお見舞い申し上げます。

みなさまいかがお過ごしでしょうか。

未曾有の震災と呼ばれる東日本大震災が起こり二ヶ月が経とうとしております。日本中が最初のショック状態から脱し始めています。

震災前は長引く不況にばかり目が向き、思うようにいかない社会経済や生活状況に不満や苛立ちが蔓延していたように思います。

そんなときにこの震災が起きました。水がない食料がない電気がない。蛇口をひねれば常にきれいな水が飲み、寒ければ暖かくし、

暑ければ涼しくでき、お店はいつでも開いていて品物もたくさんそろっている、そんな生活を私たちは当たり前ではないのに、当たり前のように感じていました。いま私たちは被災者の方々の姿を通して、忘れてはいけないことを思い出させていただいています。

この日本の今に生かされているご縁をいただいているのです。

行事予定



五月 九日

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要

第二回 団体参拝

五月二十五日

光圓寺 春季永代経法要

二十六日

講師 桑門真昭師

七月 四日

まことと会 夏法座

八月十三日

光圓寺 盆法座

十月 十日

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要

第三回 団体参拝

只今、十月の団体参拝申込みを受付中です。

七月十一日までに光圓寺へお申し込み下さい。

光圓寺 春季永代経法要

五月二十五日(水)・二十六日(木)

午後一時半より

講師 桑門真昭師

真宗大谷派 常念寺住職

桑門師は真宗大谷派の僧侶で、若くして大谷派の擬講に任ぜられた先生です。自坊で落在舎という学問的な講座を主宰される一方で、一般向けの仏教講座も開かれ、わかりやすく仏教を説かれます。

当山へは平成二十年の春期永代経法要から三年ぶりにおこし頂きます。

前回は、日頃の仏事にまつわる風習や迷信の元となった偽教について、興味深いお話を頂きました。

今回はどのようなお話になるか、みなさまどうぞお楽しみに。

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要始まる

去る四月九日（土）より、京都西本願寺において親鸞聖人七百五十回大遠忌法要が始まりました。十年間をかけて行われた「平成の大修復」が完成し、美しくなった本願寺御影堂は、五十年に一度の大遠忌法要にお参りしようと全国各地より集まった真宗門徒で埋め尽くされ、大きな感動に包まれています。

私たち安芸教区広陵西組も、法要期間中に三回の団体参拝を企画しており、そのご案内は昨年よりすでに皆様のお手元に届いていることと思います。

その第一回目の団体参拝が四月十三日より行われました。住職、坊守をはじめ当山より二十名余りが参加し、広陵西組全体では二百七十名の参拝団となりました。本願寺に到着すると、聞きしに勝る参拝者



美しく荘厳された御影堂

の人波。私たちがお参りした午前中だけで三千二百人とのことでした。決められた椅子席に座ると少々遠目ではありますが、お内陣のすばら

しいお荘厳を見ることができました。

この法要に向け「宗祖讚仰作法」というお経が新しく制定されました。法要の九日から十二日までが従来のお勤めに近い第一種。十三日から十六日までは西洋音楽の様式を取り入れた第三種（音楽法要）が勤められます。私たちがお参りした四月十三日は第三種音楽法要初日だったので、新しいお勤めにも興味深々でした。

ご門主さま、新門さまをはじめ多くの讚嘆衆について一生懸命にお念仏申し上げていると、ふと、広島での二月のお待ち受け法要の講演会で五木寛之氏のおっしゃっていた「親鸞聖人のお経は聞くのではなく、自らが声に出してお念仏することで完成するので」という言葉が思い出されました。堂内に響く大きな読経の声についてお経を読んでいると自然にいつもより大きな声が出ていたように思います。声を出すことで自分の胸の中に和らぐ部分があることを感じました。

親鸞聖人が願われたお念仏が完成した姿で御影堂に満ちている、そして自分がそれに包まれているのだと感じることができた時間でした。



経太鼓